

アトリエ 琉游舎 だより 45号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2019年1月30日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

鬼も内 福も内

- 2月3日は節分。季節を分ける言葉です。立春・立夏・立秋・立冬の前日のことですが、最近では立春の前日をさす言葉となりました。
- 旧暦では立春に最も近い新月の日が元旦。ですから立春が新年でその前日である節分は大晦日となります。節分から立春は年越しの日だったのですね。
- 豆撒きは年越しの厄払いの行事です。福豆（煎り大豆）を撒いて、年齢の数だけ豆を食べて厄除けをし、年越しにあたって新たな気持ちで新年を迎えるという考え方。
- 「鬼は外 福は内」といって撒くのが普通ですが、場所によっては「鬼は内 福は内」といって撒くところもあります。これでは厄を家の中に引き入れることになるのではないかと思われるかもしれません。
- 鬼は邪悪な鬼だけでなく、鬼神といって神様であったり、先祖の霊としての守り神。日本人にはとても大切な存在なのです。
- 最近の日本の家庭は、鬼を外に追い出すことばかり熱心で、鬼神や守り神の鬼を排除しているのではないのでしょうか。家の中の鬼のような怖い存在は何処に行ったのか？
- 家に福を招くことに執心すればするほど、外に鬼が押し出される。それは家ばかりではなく国でも同じですね。日本中世界中で「鬼は外 福は内」の声が鳴り響いています。その鬼は何処の家や国が引き受けているのでしょうか？
- 内なる鬼をあるがままに観て、自覚し、大切にし、養いつつ、外には福が自然と溢れ出る。そんな琉游舎になればいいなと、今年2回目の元旦の計です。

読書会 2月12日(火) 妙法蓮華経分別功德品第十七
2月26日(火) 随喜功德品第十八を声を出して読み説明します
13時半から

写経会
2月3日(日)
13時半から

詩話会
2月9日(土)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

1/31 木	13時半	ブローニュの森の貴婦人たち (85分)	ロベール・ブレッソン監督ポール・ベルナル主演。恋人・ジャンを試すために別れを告げたエレヌだが、期待と裏腹に別れを承諾されてしまう。裏切られたと感じたエレヌは復讐を画策する。
2/7 木	13時半	ジキル博士とハイド氏 (113分)	精神分離の研究を進めるジキルは開発した薬を飲み分身のハイドを生み出す。 ロバート・ステイブソン原作、イングリット・バーグマン、スペンサー・トレイシー主演
2/14 木	13時半	オリバー・ツイスト (116分)	チャールズ・ディケンズ原作。孤児のオリバーは奉公先から逃げ出して窃盗団員になるが悪に染まらなかった。やがて出生の秘密が明らかになり運命の渦に巻き込まれていく。
2/21 木	13時半	双頭の鷲 (87分)	ジャン・コクトー監督。警官に追われた反体制派の青年が女王の部屋に逃げ込んできた・亡き国王とうり二つの青年との間に芽生える恋、、、
2/28 木	13時半	カルメン (95分)	リタ・ヘイワース主演。ジプシー娘カルメンの魅力によって落ちていくホセ。 メリメの悲恋物語をリタ・ヘイワースのフラメンコで彩る。
3/7 木	13時半	ゴルゴダの丘 (91分)	ジャン・ギャバン主演。ローマ統治時代のエルサレム。イエスの力を恐れ始めた権力者たちは彼の処刑を策謀していた。巨匠ジュリアン・デュヴィヴィエが描く宗教史劇。

車を屋根のないところに駐車していると、コリーナではよく鳥のフン攻撃にさらされます。特に私の車の場合はサイドミラーやその近くのドアのところが集中攻撃に遭っています。おそらくサイドミラーに映る姿を自分か他の鳥か判断つかないまま、ミラーを闇雲に嘴でつつき、戸惑いと恐れの中でフンをしているようなのです。その姿を愚かといって哀れむのは簡単ですが、そこに映るもう一人の自分は何者か知ろうとして必死になっているようで、ちょっといじましさを感じてしまいます。それが私の毎日の生活の姿ともダブって見えてしまうのは私が少し考えすぎているからなのでしょう。

子供には怖いものが沢山あります。2歳の莉子はお父さん以外の男の人が怖くてなりません。3歳だったときのジオは犬がダメでした。正月に家にやって来る獅子舞の頭が怖かったり、墓の前を通り過ぎることや夜トイレに行くことが怖かったり。私も子供の頃は怖いものが沢山ありました。さて還暦を過ぎて人生も二周目に入ると、「怖いものなんぞ何もない！」と逆に強がりを出しだす始末です。怖いものがなくなったのではなく、怖いものを避けて通ったり、眼をつぶる世間知が身についただけなのでしょうにね。

日蓮聖人が信者に与えた手紙の一節です。「迷う時は衆生と名づけ悟る時をば仏と名づけたり、譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し」注1前を少し補って訳すと『（浄土や穢土といっても別の国土ではなく、そこに住む私達の心の善悪によって浄土にもなり穢土にもなるのです。）衆生も仏もまた同じで、迷う時を衆生と名付け、悟った時を仏と名付けるのです。譬えば曇っている鏡を磨いたならば輝く珠のように見えるようなものです。』浄土も穢土も迷いも悟りも私たちの内にあるものなのです。そしてその内にあるものを曇った鏡で見たならば迷いであり、磨き上げればそれは悟りとなります。鏡は自分自身をありのままに映し出します。鏡を磨き上げることはありのままに観てありありのままに行うことなのです。

ではその鏡をどこまで磨き上げればありのままに映し出す鏡となるのでしょうか。それは私には分かるはずもなく、もちろんお釈迦様でも分からないでしょう。というのも鏡を磨く行為そのものが、行いであり信心であるからなのです。信心にも行いにもここで終わりという終点はありません。ですから今この時点で私の鏡も皆さんの鏡も曇っていてあたり前なのです。何も見えなくても悲観することはないでしょう。闇鏡を明鏡にすることが目的ではなく磨き続けることが大切なのです。例えば日々を自分の願い通りに過ごすことが、自分を映す鏡を磨いていることと考えてみたらどうでしょう。お釈迦様には「每自作是念以何令衆生 得入無上道 速成就仏身」注2という誓願があります。「私は（お釈迦様）すべての人が仏の道に入り、仏になれることを常に願っている」のです。そのためにお釈迦様は永遠の過去から永遠の未来まで自分の鏡を磨き続けています。私達はそのお釈迦様の磨く鏡（教え）にいつかは自らの姿を写したいと心に願いながら、毎日自分の鏡を磨き続ければよいのです。自らの願いを誓い、それを毎日行うことが自分の鏡を磨くことです。私の場合、願いはとてもシンプルです。毎日を穏やかに楽しく豊かに過ごすこと。そのために日々の生活があり、それが私自身の鏡を磨くことだと信じています。

人それぞれ願いも鏡の磨き方も違って当然です。「深く信心を発して日夜朝暮に又おこたらず磨くべし 何様にしてか磨くべき 只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくと云うなり」注1日蓮聖人は前出の手紙に続けて、ただひたすらに「南無妙法蓮華経」と題目を唱えることが鏡を磨くことだと語っています。時代も社会も個人状況も違う中で、十把一絡げの同じ磨き方をする必要を私は感じません。何かを拝んだり唱えたりすることは鏡を磨くための準備にしか過ぎず、ただの木片や紙切れを拝んでも、田の蛙注3のようにただ題目を唱えても、それは信心を形にしているに過ぎません。形は行いが伴わなければすぐ形骸化します。私は仏さまの道を歩む方法に定型があるとは思っていません。毎日をちゃんと過ごすこと、それが自分の願いであるならばそのようにちゃんと過ごしてみることが、仏さまの道に行く自分なりの唯一の方法だと信じています。そしてそれが自分なりの鏡の磨き方であることは言うまでもありません。

自分にとっての怖い存在は私の曇った鏡を良く磨いてくれます。例えば自分を叱る存在であった両親や先生や上司は、私の言動が彼らにどのように映っているかということをお叱り激励することで私に示し、より良い行動を促し、今私は何を考え何をしてここにいるのかを、容赦なく映してくれる存在なのです。成長するにしたがってその鏡は家庭から学校、社会まで広がって行き、自分の周りは自分を映す鏡だらけとなります。そしてその鏡を避けて通ったり見ないようにする取捨選択の知恵を身に付けていきます。これは人が社会的な存在として生きていく知恵であることは言うまでもありません。私はその数多ある社会的な鏡を磨くことを諦め、毎日を穏やかに楽しく豊かに過ごすというために唯一一枚の鏡を磨き続けることに決めています。ですから「怖いものは何もない！」というのはただの強がりや聞こえるかもしれないが、私の磨く鏡をお釈迦様の磨く鏡（教え）の末席に加えてもらうのだという誓いの言葉でもあるのです。

たまに洗面台の鏡に映る自分の顔を見ると、自分ってこんな顔をしていたんだと驚くことがあります。サイドミラーに映る自分を嘴でつつく鳥の気持ちがちよっと分かった心持ちに 琉游舎：戸井 出琉・恭子 になります。自分のことを自分は何も知らないんだと。 お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850 Mail:toi101izuru@outlook.jp

注1：一生成仏抄 注2：妙法蓮華経如来寿量品 注3：琉游舎だより第25号